

# グローバル社会における 非超越的思考のモラルに関する一考察

—加藤周一の日本文化論をめぐる—

深 谷 潤

A Study on the Morality of Non-Transcendental Thinking  
in Today's Global Society:  
Focusing on the Theory of Japanese Culture by Shuichi Kato

Jun Fukaya

## はじめに

グローバル化した現代社会は、2020年に入り、新型コロナウイルスの感染拡大によってその負の面があぶり出されている。各国の対策には、未知の危機的状況を可能な限り客観的に把握し、合理的に対策を立てるものもあれば、国のリーダーの場当たりの指示が、事態を悪化させているものもある。残念ながら、日本の対策は、後者に属していると言わざるを得ない。日本は、先進国のなかでも、ハードウェアの面では、精密機械や自動車産業などの製造業に代表される技術立国として国際的に評価されてきた。他方、ソフトウェアでは、日本の伝統文化ばかりでなく、アニメ、マンガなどポップカルチャーに到るまで、世界的に優れたコンテンツを生み出している。

本稿では、ハードやソフトの生産ばかりではなく、外から生じる出来事や目の前にある事物を客観的に認識し、主体的に判断していく過程において、対象にかかわらず共通した日本独自の考え方の特徴があるのではないかと仮定する。この仮定自体は、非常に漠然としている。しかし、日本文化や思想などの様式や枠組みを考察した先行研究も少なくない。それらは、主に「日本文化論」

の領域にまとめることができる。本稿では、日本の文化そのものではなく、その文化を生み出す日本人の意識や発想など、端的には思考方法の特徴を明らかにする。さらに、その思考におけるモラルについて考察する。なぜなら、グローバル社会において多様な価値観が混在する中、他者間の合意をいかに得ることができるかが、大きな課題となっているからである。

先行研究の一例として、仏教学者の中村元（1912-1999）による『日本人の思惟方法』（1989年初版）がある。また、政治思想の専門家、丸山真男（1914-1996）の「古層論」（1964年）、土居健郎の「甘えの構造」（1971年）、中根千枝の「タテ社会の人間関係」（1967年）等、様々な学者たちが、日本の文化や社会の根底に潜む日本人の意識の型を宗教・思想、心理学・社会学などのモデルによって説明してきた。これらの多様な考え方の中で、本稿では評論家の加藤周一（1919-2008）の日本文化論に注目する。彼は、古代文学、文化・文芸から現代日本の思想、文化、政治にいたるまで、幅広いジャンルに通じている。また、フランスを始めとし長期に海外に滞在<sup>1</sup>し、日本と欧米の複眼的視点から日本文化と日本人の思考方法を論じることのできる稀有な思想家の一人である。第1章で、加藤の文化論の下敷きとなるような理論を展開した中村と丸山の論を先行研究として取り上げる。次に、加藤の文化論の特徴を説明する。そこで日本的思考の特徴を一旦規定した上で、その視点から今日のグローバル社会における課題を考察していきたい。

## 1. 日本的思考の特徴

冒頭で触れたように、未知なるものや出来事と目前にある対象や直接的に体験する事柄すべてを一つのモデルで説明することは困難であるが、そのような課題に取り組んだ研究者の一人に仏教学者の中村元がいる。

中村の論説は、1989年に刊行された『日本人の思惟方法 東洋人の思惟方法Ⅲ』（中村元選集 第3巻 春秋社）に明らかにされている。以下、彼の主張を大まかに要約する。

日本人は、日常の手の届く現象界を超えた世界を認めない思惟方法をとる<sup>2</sup>。そこから、身近な人間関係を重視する現世主義、そして論理性よりも直観にた

よる非合理主義が生まれる。客観的でかつ複雑な秩序よりも、主観的な情緒<sup>3</sup>にたよる、単純な象徴を好む傾向<sup>4</sup>がある。外来の仏教は、日本ではこれらの思惟方法によって、現世利益を追求し、呪術的な性格をもった世俗の宗教に変容していった。

ここで示した日本独自の思考方法は、現世主義、非合理主義に代表されるであろう。現世主義について、中村は、「日本人は、大陸から受容した仏教を、現世中心的なものに変容してしまったのである。」<sup>5</sup>と言及している。本来、インドの仏教徒は、生きとし生けるものは、無限に輪廻の過程を繰り返すものであり、現世は、そのうちの一時期にすぎない。しかし、日本では、現世利益を目指すものに変えられたと言う。<sup>6</sup> もう一つの特徴である非合理主義について、中村は、日本語の構造について触れている。「日本語には関係代名詞がないために、関係代名詞によって前出語句を受けて、思考過程をしないで発展させてゆくという語法がないので、論理的に思考を進めるのに不便である」。<sup>7</sup> また、抽象的な発想の乏しさについても、次のように指摘する。「(略) ともかく普遍者を普遍的概念として表示する方法が、日本語においては十分に確立していなかったと言うことだけは言うのであろう。」<sup>8</sup> これらの特徴は、次の丸山真男においても別の形で表される。

丸山の日本の文化や社会を論じたもので、最も分かりやすいモデルを示したのが、「タコツボ型」の文化モデルであろう。<sup>9</sup> これは、集団や組織が閉鎖的な人間関係によって構成されており、他の集団とのヨコのつながりに乏しい特徴がある。しかし、それ以上に注目すべきは、日本文化の原型を「古層」と表現し、後に「バツ・オステイナー (執拗低音)」<sup>10</sup> と言い換えた「古層論」<sup>11</sup> である。吉凶観や善悪観は、日本文化から外来文化からの要素を取り除いて<sup>12</sup> も最後まで残る「原型」<sup>13</sup> であり、いつの時代にも変わらない共通した変化のパターン<sup>14</sup> であるという。吉凶観は、何らかの行為の動機が純粋な心情<sup>15</sup> であれば高く評価されるものの見方である。また、善悪の判断は、特定の共同体にのみ適用され、普遍的なものではないという。これは、「集団的功利主義」<sup>16</sup> と名付けられた。さらに、日本の「古層」では、ただただ不断の変化と流転の層のもとに事物を見る思考が、「歴史主義的相対主義」<sup>17</sup> だとするという。また、

「現在中心主義」とも言い換えている。

中村や丸山の思想にみられる日本人の時間意識（現世主義）や合理的判断よりも主観的心情を優先する非合理主義といった特徴は、加藤においても引き継がれている。次に加藤の日本文化論から、日本的思考法の特徴を探っていくことにしたい。

## 2. 加藤周一の日本文化論

加藤が日本文化を語った最初の論説は、「雑種文化」(1955年)<sup>18</sup>であった。その後、様々な論説を発表し、古代から現代まで壮大なスケールで日本文化を論じた『日本文学史序説（上）、（下）』（1975, 80年）を刊行した。晩年（88歳）に、『日本文化における時間と空間』（2007年）を著している。彼の卓越した文化評論の幅広さを、日本文化論として要約することは、極めて困難である。また、加藤本人が、日本文化の特徴を説明する場合、それが5種類<sup>19</sup>であったり、3種類<sup>20</sup>であったりする。しかし、敢えてそれらを大きく統合すると、時間と空間における部分主義ということができるであろう。加藤自身は、部分主義と現在主義ほか、別の特徴を分けて論じているが、「今」という現在の時間を歴史的な流れから切り取り、部分的に強調する態度や、「ここ」という自分が経っている特定の空間に限定し、そこに集う人間関係のみが価値判断の基準になる集団主義は、部分主義から発展した特徴と見なすことができる。

部分主義の時間・空間の具体例を交えて、さらに説明したい。時間における部分主義は、西洋的な意味での歴史的な時間の意識ではない。いつ始めるとも知れず、いつ終わりが来るかもはっきりしない、ただ現在がどこまでもつづいていくことを特徴としている。それが、現在主義と言われる。<sup>21</sup> 具体的に、それは12～14世紀につくられた絵巻物に見られるという。絵巻物は、構造上、全体を一度に見ることはできず、常にある一部しか見ることができない。前後の文脈より、現在の場面だけを理解することが優先される。そのため、現在は予測不可能であり、突如として何かが現れる。そこで、予測し難い状況の変化に素早く対応しなければならないことになる。<sup>22</sup>

他方、空間における部分主義は、「全体の秩序よりも、部分の感覚的洗練が

強調され、「細部から離れた全体を秩序づける原理がない」ことが特徴である。彼が挙げた具体例の一つは、17世紀初めの大名屋敷の平面図である。徳川初期の屋敷は、左右対称でなく、途方もなく複雑な構造をしている。それは、建物全体の空間をはじめに考えることなしに、部屋を先に作りはじめ、その後建増していった、最後には想像もつかない全体の形になったと言うのである。<sup>23</sup> 建築以外にも、彼は文学の例を挙げている。平安朝の『宇津保物語』は、短編をたくさん積み重ねて自ずと全体になった形であると言う。人の一生を時系列に並べるのではなく、独立した特徴の強い章が並列されていると指摘する。<sup>24</sup>

先の中村や丸山と加藤の日本的思考法の特徴を比較してみる。

現在の状況を重視する観点は、中村において、善悪の価値観にまで影響する。「自己の所属する人間結合組織の現在の状況にとって好適であるか不適であるかということが、そのまま善悪決定の基準となってしまうのである。」<sup>25</sup> 丸山において、現在を重視するとは、「現在の瞬間を肯定的に生きる」<sup>26</sup> ことである。しかし、その「瞬間」には永遠は宿らず、不断に変転する時間の流れであり、「オブティミステック」である。そこには西洋文化に見られるような時間を超越した絶対者は存在しない。従って、絶対者と人間との関係性は存在せず、自己の存在の意味付けを外から与えられる構造にはなっていない。つまり、生きることへの肯定は行われず、一切が無常となる。<sup>27</sup>

加藤において、現在を強調する現在主義は、この世（此岸）の中だけで完結するものに関心を向け、その世界を超えた次元に向かわない、現世主義である<sup>28</sup>。彼の現世主義は、あくまで身近なこの世の中、つまり此岸性の部分を強調した点に特徴があるであろう。

他方、非合理主義について、先述のように中村は、日本語自体に論理的思考を阻む要素がある点に触れる。主語を省略し、行為の主体を明示しない、人格を意識しない等を例に出している。<sup>29</sup> 丸山において、非合理主義は、心情の純粹性において明らかになる。行動の動機が純粹な心（「キヨキココロ」）から出たのであれば、行動が客観的規範に違反していたとしても、評価が高くなる。<sup>30</sup> この「ココロ」の絶対的基準が、共同体内で功利主義と結合し、その共

同体のための規範となる。そのため、その基準が具体的人間関係を越えた普遍的な倫理規範になることはない。<sup>31</sup>つまり、日本的思考法の「合理性」は、特定の共同体内だけに通じる「理」なのである。加藤において、この特徴は、集団主義の中で主に展開されている。普遍性を伴わない、純粋な動機を基準とした主観主義の強調は、一部に過ぎない特定の人物の「キヨキココロ」を共同体内に拡張し、絶対化する傾向をもつのである。

以上のような日本的思考法の特徴は、日本に特殊なものとして捉えず、人類に共通した、人間のプリミティブな思考がそのまま現在まで残っていると考える研究者もいる。民俗学研究者の干場辰夫は、加藤の日本文化論を「雑種文化」ではなく「土着世界観」と解釈できると指摘<sup>32</sup>し、「タンジブル」(触れることができる)思考<sup>33</sup>である、と捉えている。干場の主張は、文化人類学的な観点から、改めて考察されるべき課題であり、本稿では取り扱わないこととする。

さて、加藤の日本文化論の特徴を部分主義の強調として捉えた<sup>34</sup>。空間的には、自分の身の回りの事物や人間関係など、あくまでも身近な世界内での出来事や事物を対象とする認識であり、時間的には、今、現在の関心事が中心となり、過去の価値観が現在に影響を及ぼすことなく、未来に何らかの目標を設定するわけでもない、あくまでも今、ここにいる自分を中心に、そこから離れることなく、現在を無目的に、その場の勢いのまま延長する時間意識である。このような時空の認識は、換言すると、今、ここにいる自分を別の視点から眺めることのない、すなわち、超越した視点の欠如とも表現できる。ここでは、それを「非超越的思考」と概念規定することとしたい<sup>35</sup>。

### 3. 「非超越的思考」のモラル

日本的思考法を非超越的思考として捉えた時、その思考は、日本社会の中でどのような価値観が展開されてきたのであろうか。換言すれば、人間関係において何が善しとされてきたのか、モラルの在り方を次に説明する。

非超越的思考は、日本社会を「世間」という人間関係に縛られた同調圧力の強い共同体の中で、いかんなくその特徴を発揮してきた。阿部謹也の『世間と

は何か』<sup>36</sup>を皮切りに、今日、世間に関わる考察は、様々な場面で語られている。西洋のように、個人を前提とした社会が成立しない日本社会では、「個人」があいまいな存在として人間関係の中に置かれている。加藤は、「高度に個人が集団に組み込まれている」<sup>37</sup>と表現している。私たちは、人間関係の枠組みとして世間を想定し、漠然とした実態の見えない世間に対して自分の名誉を守ったり、謝罪したりするのである。ユダヤ・キリスト教やイスラム教など唯一神教の世界観を前提に社会を発達させてきた欧米社会では、神という絶対的存在者を通して、個人との関係を措定する考え方、即ち超越的思考がある。しかし、神を措定せず、人間関係の枠の中だけで自分の存在や善悪の価値観を決めてきた日本的思考では、世間が「神」的存在にとって代わる。世間を騒がせず、世間体を守ることが何よりも求められる姿なのである。

その世間と言う人間のつながりの中には、タテの序列<sup>38</sup>が機能している。古くは、武士社会における主従関係をルーツとする。主人には絶対服従であり、合理的な理由を求めたりすることは、禁止されている。狭い人間関係においてであっても、そこには上下関係が存在する。1年や1か月年長であるものが上という半ば儒教的な価値観がいまだに残っている。「先輩・後輩」の上下関係は、当人の能力と無関係に、後輩が先輩を敬わなければならない「掟」がある。超越者との関係における絶対的価値観や信仰ではなく、限定的な人間関係における相対的な価値観、いわゆるモラル（道徳）が日本社会を規定する。<sup>39</sup>

加藤において、非超越的思考のモラルに関する議論は、部分主義の発展型としての集団主義において顕著である。集団主義は、端的に言えば、人間関係のみに価値判断が縛られることを意味する。そこには、4つの要素<sup>40</sup>があるが、モラルに関して言えば、責任感の位置付けに大きな特徴がある。日本社会は、同調圧力が高く、皆が同じであろうとし、同じ意見や行動を仕様とする傾向が強い。少数意見を大切にしない。しかし、同時に集団間での競争が激しくなると、他の集団より秀でようとする思いが強くなり、集団内での能力主義が助長され、適材適所に人を配置されるようになる。みんなが一つとなり、一丸となって一つの目標を達成しようとする。このことは、集団主義のプラスの面である。他方、一つとなることは、個人としての人間の在り方や責任の所在が不

明確になることでもある。みんなに責任があるということは、同時に誰にも責任がないということと、同じである。<sup>41</sup> 日本社会において連帯責任として、集団全員に責任を帰し、リーダーの責任をうやむやにすることは、第二次大戦直後の、日本の戦争責任の取り方をみれば明らかである。<sup>42</sup>

このような責任感の欠如は、個人の倫理観の未熟さに起因していると言える。個人としての人間の在り方が、日本文化の中で稀薄であったことは、集団主義のモラルにおいて、超越的存在の措定がなされていないことにその要因があると考えられる。<sup>43</sup>

#### 4. 考察（「グローバル人材」を考える）

非超越的思考を持ったままの私たち日本社会の構成員に対して、今から10年以上前、文科省が今日の社会に対応できる人材を育てる方針を打ち出した。それが「グローバル人材」である。日本政府が当初想定していた「グローバル人材」とは、以下のように説明されていた。

グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、さらにはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材。<sup>44</sup>

文中の「取引先、顧客等」の表現から容易に推測されるように、「グローバル人材」とは、一言で言うならば、「国益にかなう経済人」であったと言える。その1年後、新たな委員会の下で再定義された「グローバル人材」は以下のようになった。

世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる

言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間。<sup>45</sup>

ここでは、「日本人としてのアイデンティティ」や「協調性」、「次世代までも視野に入れた～意識」に見られるように、自分や自国の利益だけではなく、他者や次世代にいたる幅広い視野に立った貢献が求められていることがわかる。「グローバル人材」という言葉は、一般起業のみならず、大学を含めた教育機関において、「コミュニケーション能力」や「生きる力」の育成を教育目標に掲げる中でしばしば登場する。

「グローバル」とは、言うまでもなく地球規模の発想をもった経済・文化・政治等のつながりを志向する。その意味では、非超越的思考における特定の共同体の利益を求めることは、問題外である。コロナ禍をはじめ、エネルギー、環境問題、経済格差、人種・宗教等、様々な要素が複雑に絡み合った国際社会の中で、未来を見据え、国境を越えた次元で対話をすることが、グローバル人材に求められる「コミュニケーション能力」であろう。非超越的思考に留まる日本人が身に付けるには、不可能な能力なのであろうか。

国際間の紛争において、宗教的対立が背景にあることが少なくない。日本人の国連職員が少ないといわれているが、国際的な仲介役として、日本が果たす役割はますます大きくなっている。国際連合の理念<sup>46</sup>の嚆矢は、カントの『永遠の平和のために』に見出される<sup>47</sup>。カントがいう「目的の国」（倫理学）とは、「すべての人間が互いに尊重し合う共同体」<sup>48</sup>である。その共同体を作り出す為に、日本的思考にはどんな課題があり、また何か国際社会に貢献できるものはあるのだろうか。

昨年12月にアフガニスタンで殺害された中村哲医師（1946～2019）は、1984年から当地の医療に従事し、2000年からは灌漑整備に尽力し、砂漠を緑地に代え、飲料水を確保し、人命を救ってきた。キリスト者であった彼には、自分の利害関係と無関係な他者に対する隣人愛の実践が可能であったのだろう。しかし、中村氏のような超越的視点をもっている日本人は、残念ながら少

数派と言えよう。

コロナ禍の中で、人間同士の接触が物理的に困難となる中、小さな出来事ではあるが、日本社会で珍しいことが生じた。政府の方針で、検察庁長官の任期を無理やりのばそうとしたことに対して、芸能人らが中心となり反対運動をおこし、結局却下されたのである。<sup>49</sup>このことは、普段時事問題にあまり関心のなかった人々が、時間の余裕があったためか、ニュースを見て、自らおかしいと判断し、反対の意志をSNS上に載せたことが発端であった。政治に関心のない人々が、素直に自分の頭で考え、合理的に判断したことが、一つのムーブメントを引き起こした例といえる。SNSという匿名性の高い、見知らぬ者たちの集まりには、世間とは一種違う、個人の意見としての在り方が保障されている。日本社会の特定の人間関係とは異なる「あり方」である。時には、「ネット上での炎上」のような同調圧力も生じる。他方、一人の声に多くが共感し、一つのムーブメントを形成することもある。新しい社会の在り方が、ネット上に生まれては消えていく。日本語でのテキストに限定するならば、日本語を介する人間同士の範囲になる。しかし、英語となれば全世界を社会の構成員にすることができる。グローバル人材は、まさにこのような社会にアクセスし、さらにそこで能力を発揮できる人間なのである。

仮に非超越的思考が、SNS上で展開されたらどのような現象がおこるであろうか。この思考の特徴は、先の通り現世主義であり、非合理主義である。負の面から見ると、今自分さえよければよく、悪気がなかったことは、すべて許される、という自己正当化がまかり通る態度で現れる。社会に対していら立っている人物が、ストレス発散に誹謗中傷をネット上に欠き散らす行為は、まさに非超越的思考を実践していると言えよう。自分が今抱えている不快な感情を爆発させるために、今日ついたターゲットを攻撃する。ターゲットにされた人物が、どんな思いを持つかは考えない。感情に任せ、攻撃する自分を正当化する。(相手の態度が生意気だったから。社会のくずだ等。)非超越的思考で他者を攻撃する者は、ネット社会の匿名性で自らを防衛していると勘違いしている。彼等・彼女等は、ネット上のデータは、簡単に消去されず、画像も含め半永久的に残ることを忘れている。

このような危険性をネット社会がますます拡張している今日において、可能な限り解消するためにも、超越的思考のできる人間の育成が日本において求められていることは確かである。身近な人間関係の束縛から離れ、周りを気にせず自らの思考を深めていくことが、超越的思考を養う基本的な態度であることが、図らずもコロナ禍の状況で露呈した。これが、一つの突破口となるかもしれない。

## おわりに

最後に、非超越的思考の積極的側面を指摘しておきたい。それは、善悪の判断を「勸善懲悪」の枠組みに押し付けて考えないことである。丸山は、善悪は、実体としてあるのではなく、その機能において生じるものであること指摘した。<sup>50</sup> 神に善または悪が「本質的に (intrinsic)」内在しているのではなく、具体的機能そのものに善悪の基準があるという。彼によれば、生成・成育・生殖を促す活動が善であり、それを阻害するものが悪なのである。<sup>51</sup> つまり、性善説でも性悪説でもなく、誰であるかよりも何をしたのかによって、善悪の価値が決まるプラグマティズムの立場をとる。この観点は、グローバル社会において、出身や所属によってアイデンティティが限定され、さらにそれが永久に変更されないことの不都合さを解消する契機となるのではないだろうか。

民族や宗教、言語、性別、社会的地位など様々な要因から我々は、自分の立場を説明する。また、相手をそれらの要因から識別し、固定観念をもつ。そのような「本質的」要素から自由になることを、実は非超越的思考が内在しているならば、グローバル社会におけるプラグマティックな展開をさらに促進することに寄与するであろう。非超越的思考における機能的要素のプラス面については、今後さらに考察を進めていきたい。

## <参考文献>

- 加藤 周一「日本文化の雑種性」思想 1955年6月号 pp.635-647 所収  
加藤 周一・M. ライシュ・R.J. リフトン『日本人の死生観 (上)』(矢島翠訳) 岩波書店 1977年  
加藤 周一『日本文学史序説 (上)』筑摩書房 2008年 (1999年初版)

- 加藤 周一『日本文学史序説(下)』筑摩書房 2007年(1999年初版)
- 加藤 周一『日本その心とかたち』ジブリ Library 徳間書店 2009年
- 加藤 周一「日本」現代思想7月臨時増刊 総特集 加藤周一 青土社 Vo.37-9, pp.28-41, 2009年(加藤2009b)
- 加藤 周一「日本社会・文化の基本的特徴」『日本文化のかくれた形』加藤周一・木下順二・丸山真男・武田清子著 岩波書店 2014年 pp.17-46所収
- カント『永遠の平和のために』(宇都宮芳明訳) 岩波書店 2006年
- 中根 千枝『タテ社会の人間関係』講談社 1986年(1967年初版)
- 中村 元『日本人の思惟方法 東洋人の思惟方法III』中村元選集 第3巻(決定版) 春秋社 1997年(1989年初版)
- 干場 辰夫『「日本文化論」を越えて—加藤周一「土着世界観」論とその行く先—』花伝社 2019年
- 丸山 真男『丸山真男講義録 第四冊 日本政治思想史1964』東京大学出版会 1998年(丸山1998a)
- 丸山 真男『丸山真男講義録 第六冊 日本政治思想史1966』東京大学出版会 2000年
- 丸山 真男『丸山真男講義録 第七冊 日本政治思想史1967』東京大学出版会 1998年(丸山1998b)
- 丸山 真男『日本の思想』岩波書店 1987年(1961年初版)
- 丸山 真男『丸山文庫所蔵未発表資料翻刻: “Some Aspects of Moral Consciousness in Japan” (倫理意識の「古層」原稿)』東京女子大学比較文化研究所付属丸山真男記念比較思想研究センター報告 10巻 2015年3月 pp.148-122 所収

## <註>

- <sup>1</sup> 彼は、最初にフランス政府留学生として32歳のとき渡仏した。(1951-1955)その後、1960年にカナダのプリティッシュ・コロンビア大学准教授に就任した。さらに、1969年にベルリン自由大学教授に就任(50歳)した。以下、様々な大学で客員教授や講演活動を行った。(1974年イェール大、1978年ジュネーヴ大、1983年ケンブリッジ大、ヴェネツァ大、1986年メキシコのコレヒオ・デ・メヒコ大、1987年プリンストン大、1989年カリフォルニア大、1992年ベルリン自由大学、1994年北京大学、1997年米國、ポモナ大) cf. 海老坂武『加藤周一—21世紀を問う』岩波書店 2013年
- <sup>2</sup> 中村1997, 西洋人からみると、日本人は、「いかなる事物にも神聖性と存在意義を認めようとする思惟方法がはたらいっている」と言う。(p.23)「日本人にとっては“Everything is Buddha”なのである。」(ibid.)
- <sup>3</sup> ibid. 先の現世主義において、人間関係が重視されたことから、この主観的情緒が導かれる。「この(特定権威に対する全面的帰投の態度)ような傾向が、日本人のあいだに顕著であるわけは、日本人が狭い範囲に形成された共同生活において、人格と人格との緊密な結びつきを要請し、人々のあいだに親和結合感が顕著であることによるの

であろう。しかしそれは他面では自我の独立性の意識を稀薄ならしめ、権威に追従し、付和雷同する傾向を濃厚にさせるおそれがある。」(p.245)

- <sup>4</sup> ibid. 単純化は、非合理主義に基づき、物事について批判的・論理的に突き詰めて考えない結果生まれてくる思考パターンと言える。「単純化ということも、宗教が大衆化する場合には、つねにそうなるというものであろう。西洋でも、たとえば十字をきったり、あるいはごく要約された文句で述べるということがおこなわれている。だからこれは人類に普遍的な現象である。しかし、単純な象徴的表現のみを繰り返せばよいと教えたのは、おそらく日本人の宗教の顕著な特徴ではなかろうか。」(p.444)

<sup>5</sup> ibid., p.39

<sup>6</sup> ibid., p.40

<sup>7</sup> ibid., p.373

<sup>8</sup> ibid., pp.380-381

- <sup>9</sup> 丸山 1987, p.129, 132, 150 「タコツボ型」などの文化モデルは、1957年6月の岩波文化講演会で登場した。彼は、西洋の文化は、基になる部分が共通であり、そこから細かく分かれている、竹の先を細かくいくつにも割った「ササラ」の型をしているという。ギリシアから中世、ルネッサンスに到る長い共通の文化的伝統が根にあり、末端が多く分化している「ササラ型」である。それに対し、日本の文化や社会は、それぞれ孤立した集団が並列している「タコツボ」型であるという。個々の集団は外とは没交渉であり、閉じられた組織である。「横に等質的なコミュニケーション」がない。

- <sup>10</sup> 丸山は、1964年の日本政治思想史講義録の中で、思考様式の原型（プロトタイプ）を講じ、日本文化が「執拗な持続性」と「急激な変化性」の二重構造になっている、と指摘していた。(丸山 1998a, p.48) “basso ostinato” は、「倫理意識の『古層』」英文 “Some Aspects of Moral Consciousness in Japan”, p.141 に登場している。

- <sup>11</sup> 干場 2019, p.94 「古層」の内容については、公刊されたものとして、『丸山眞男講義録 [第四冊] 日本政治思想史 1964』、『丸山眞男講義録 [第六冊] 日本政治思想史 1966』、『丸山眞男講義録 [第七冊] 日本政治思想史 1967』という講義録があり（なお講義の名称は1966年度までは、「東洋政治思想史」、67年度は「日本政治思想史」）、毎年の講義の冒頭部分に「古層」論（当時は「原型」と言う言葉を使っていたが、ここでは「古層」という言葉に統一したい）が論じられていた。(略) その後丸山はこの「古層」を、「便宜的に」三つの領域に分けている。①歴史意識（丸山 1998a, 「歴史像と政治観」 pp.66-81）、②倫理意識（丸山 1998b, 「倫理意識の『原型』」 pp.53-73）、丸山 2015, pp.148-122、③政治意識（丸山 1998b, pp.95-129）

- <sup>12</sup> cf. 丸山 1998b, p.50 「(略) 儒教・仏教など、明らかに後になって大陸から流れ込んだ語法や諸観念を除去し、また後に「神道」といわれるものの諸観念と民間伝承の諸観念を照合させてゆくと、そこに持続的なものとして、高度に抽象的な世界像としての儒仏とは異なった思考様式・価値意識を認めることができる。これを再構成して一つの仮説として立てたものが、ここでいう「原型」である。」

- <sup>13</sup> 丸山 1998a, p.41 彼によれば原型とは、「社会結合様式および政治的行動様式の原初的形態、ならびに神話・古代説話に現れた思考様式および価値意識（文化）をいう。」また、「つぎつぎに摂取された外来文化は日本の精神構造の内部に層をなし、より新

- しい層と古い層の間に不断の相互作用が行われる。最下層に沈殿しているもの」であるという。(丸山 1998b, p.49)
- <sup>14</sup> 丸山 1998b, p.36
- <sup>15</sup> 丸山 2000, pp.29-30 彼は、「純粹動機主義」と呼んでいる。「これは客観的倫理規範としては定義できず、動機がキヨイほどよいとされる。この価値基準からすれば、客観的規範に違反しても純粋な心情にでる行動は高く評価され、行動効果を考慮したものはズルイという評価を受ける。」
- <sup>16</sup> 丸山 1998a, p.59, cf. 丸山 2000, p.29 「自己の所属する共同体にとって外から利福をもたらすものが善、災厄をもたらすものが悪という考え方。つまり特定共同体への禍福を基準に善と悪を判断する。個人が基準ではない。(略) 特定集団にとっての相対的な功利が善悪の基準とされ、特定共同体を超えた絶対的倫理基準がない。」
- <sup>17</sup> 丸山 1998a, pp.67-68 日本人の時間に対する意識は、「時は不断にうつろう」という自然的時間の経過が想定されており、それが「歴史」と考えられている。(丸山 1998a, p.71) さらに、キリスト教のような時間を超越した永遠も、絶対者もない。時間がただ無限に持続している(「無窮」)のが日本人にとっての永遠であり、次元を超越した観点も形而上学もそこにはない。(丸山 1998b, pp.82-83)
- <sup>18</sup> cf. 加藤 1955
- <sup>19</sup> 加藤 2009, pp.186-193, 彼は、日本文化には、1. 此岸性、2. 集団主義、3. 感覚的世界、4. 部分主義、5. 現在主義の5つの「文法」があると考えた。(「日本文化の文法」、『日本その心とかたち』2009年 所収)
- <sup>20</sup> 加藤 2014, pp.19-20 彼は、「日本文化のパラダイム」として、1. 競争的集団主義、2. 現世主義、3. 現在主義をあげている。
- <sup>21</sup> *ibid.*, p.33
- <sup>22</sup> *ibid.*, pp.34-35
- <sup>23</sup> 加藤 2014, p.32
- <sup>24</sup> *ibid.*
- <sup>25</sup> 中村 1997, p.92
- <sup>26</sup> 丸山 1998a, pp.67-68
- <sup>27</sup> 丸山 2000, p.36, 38
- <sup>28</sup> 加藤は、日本文化の文法において、現世主義は、時間軸からみると、現在主義と関連し、現在主義は、集団主義と部分主義に関わる、と説明する。(加藤 2009, p.321) それぞれ「～主義」とあるが、相互に関連し合い、分離されていないことが分かる。
- <sup>29</sup> 中村 1997, p.125
- <sup>30</sup> 丸山 1998a, p.60
- <sup>31</sup> 丸山 1998b, pp.65-66
- <sup>32</sup> 干場 2019, p.27
- <sup>33</sup> *ibid.*, p.36
- <sup>34</sup> 加藤 2007, pp.263-264 加藤は、時間における「今」の強調と空間における「ここ」の強調は、「時間的部分主義」と「空間的部分主義」である、と言及する。
- <sup>35</sup> 日本における超越の概念に関する論考は、拙文『「ヨコの超越」と人格性』(西南学院

大学人間科学論集第6巻2号2011年2月)を参照のこと。

- <sup>36</sup> 阿部謹也『世間とは何か』講談社 1995年
- <sup>37</sup> 加藤2014, p.30, 加藤1977, v
- <sup>38</sup> 中根千枝は、日本社会では、人と人との関係を何よりも優先する価値観が、人の考え、行動を規制する、と述べている。それは、「社会的強制」であると言う。(中根1986, p.170)
- <sup>39</sup> ibid.
- <sup>40</sup> 加藤2009b, pp.37-38, 加藤2014, pp.19-43, 集団主義には、①競争の激しさ(集団間でも、集団内でも激しい)、②此岸性(日常生活外のものに積極的に関わらない)、③現在優先(過去の都合の悪いことは早く忘れる)、④目的志向型(ある目的のために競い合う、その結果能力主義的な集団を形成)
- <sup>41</sup> 加藤2014, p.27
- <sup>42</sup> 戦争責任に関して加藤は、丸山真男の言葉を引用している。「『日本政治の心理と論理』で、ニュールンベルク裁判と東京裁判とを比較しています。(略)日本の戦争指導者たちは、みんな、自分は戦争をしたくなかったけれども、なんとなく空気が戦争の方に動いたから、賛成したのだと言う。(略)これは、まことにおどろくべきことです。」(加藤2014, p.27)
- <sup>43</sup> 加藤2009b, p.38「現世主義の世界観は、現世=共同体に超越する絶対的価値をみとめないから、価値としての所属感に対する挑戦は起こりがたい。(略)ムラ人個人がその目標を批判し、みずから正しいと信じることを徹底的に主張する根拠はない。個人の意見の正しさをその当人に保証する<天命>も<自然の理>も、人格的な神の与える<十戒>もないからである。かくして非超越的な世界観は、集団主義を強め、逆に強い集団主義の内部においては、集団を超える絶対的価値への信仰が成立しがたいだろう。」
- <sup>44</sup> 産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会、2010年4月
- <sup>45</sup> 産学連携によるグローバル人材育成推進会議、2011年4月
- <sup>46</sup> 国際連合の目的には、「人種、性、言語または宗教による差別なくすべての者のために人権及び基本的自由を尊重するように助長奨励することについて、国際協力を達成すること」(国連憲章第1条3.)と謳われている。
- <sup>47</sup> カント2006,「国家観の永遠平和のための予備条項 第二条項 独立しているいかなる国家も、継承、交換、買収、または贈与によって、ほかの国家がこれを取得できるということがあってはならない」(pp.14-15),そこに示される原理は、どんな民族的、宗教的立場であっても、人類共通で、アプリアリ(先験的)な公式である。カントが言う「公表性の先験的原理」は、「他人の権利に関する行為に、その格率が公表性と一致しないものは、すべて不正である。」というものである。(p.101)
- <sup>48</sup> カント2006, p.137(解説 宇都宮芳明)
- <sup>49</sup> 検察庁法によると、検察官の定年は、63歳である。東京都高等裁判所検察官の黒川弘務検事長(62歳)の定年延長を、安倍政権が閣議決定(2020年1月31日)したことが波紋を呼んだ。黒川氏は、安倍政権と距離が近いと報道されている。政治的中立性が厳しく求められる役職の延長は、野党だけでなく、普段政治的発言をあまりしな

い芸人（「いきものがかり」の水野良樹、俳優の秋元才如、小泉今日子、元格闘家の高田延彦、歌手の Chara, モデルの水原希子ほか）からも、多くの投稿がネット上にあがり、数百万件のツイートが記録された。（朝日新聞 [https://asahi/gakujo.ne.jp/common\\_sense/morning\\_paper/detail/id=3007](https://asahi/gakujo.ne.jp/common_sense/morning_paper/detail/id=3007), 2020年5月15日）

<sup>50</sup> 丸山 2000, p.31, 1998b, p.67

<sup>51</sup> 丸山 1998a, p.63